



廣瀬川

第98号

令和2年
8月31日

仙台市小学校長会

発行者／花渕 浩司（会長） 責任者／千田 博史（広報部長）

主張

鳥の眼、虫の眼、 魚の眼、コウモリの眼

会長 花渕 浩司（木町通小学校）



校長の仕事は、「学校を『経営』することである」と言われます。似たような言葉に「学校を『運営』する」というものがあります。この違いは何かを考えてみたいと思います。

違いがよく分かりませんが、私は運営とは、「日々の学校を動かしていくこと」であり、経営とは、「子供と職員の成長を意図的・計画的・継続的に行うこと」なのではないでしょうか。これが、学校教育法でいうところの「校長は、校務をつかさどる」にあたると思います。

私は、学校経営をする上で必要になる視点が四つあると思います。

一つ目は、「俯瞰する眼（鳥の眼）」です。校長は、学校全体に目を配り、気を配り、心を配らなくてはなりません。とすると、目の前で起きていることばかりに気をとられ、全体を見誤ることがあります。そんなときは、俯瞰するもう一人の自分の眼で全体を見てはどうでしょうか。

二つ目は、「掘り下げて見る眼（虫の眼）」です。全体を俯瞰するといっても、全体は一つ一つの事象の集合体です。平時はそれでよいかもしれませんが、問題が起こった時は、「なぜ、それが起きているのか？」「その原因は、どんな構成要素によってもたらされているのか？」課題が漠然としている時、壁にぶち当たっている時、トラブルが起きた時など、問題発生時に、より細かく見るという虫の目が役に立ちます。観察力、洞察力、論理的思考が求められます。目の前の問題を、細かく掘り下げることで、課題を明確にすることができます。

三つ目は、「流れを見る眼（魚の眼）」です。学校は、常に動いています。流れています。これまで何が起きていたのかを細かく分析し、そして、これから起きることを予想し、対応策を考えていく。その場に立ち止まっていたら、時間は過ぎていきます。校長には、動き回りながら、最善策を講じていく魚の眼が必要になってきます。

最後は、「発想を変える眼（コウモリの眼）」です。様々な課題に立ち向かってうまくいかない時があります。そんなときは、コウモリのように逆さになって物事を追求することが大切な時があります。発想を変え、視点を変えてみるといいアイデアが生まれることがあります。そんなときに役に立つものが、「クリティカルシンキング（批判的思考）」です。クリティカルに考えるというのは、これまでの常識や前提に捉われず、本質を追求する姿勢です。「前はうまくいった。」「これが常識だ。」という固定概念に固執することなく、子供の思い、保護者の願い、担任の立場、といった関係者全ての立場に立って考えられないと、どこかでゆがみが生じてしまいます。そのようなことが起きないように、コウモリの眼が重要なのです。

新型コロナウイルスとの戦いは、長期戦になると言われています。これから訪れることが予想される第二波、第三波に向けて、何よりも私たち校長自身が健康であり続けることが大切になります。自分の学校の子供たちと、先生方の命を守っていくことこそが、私たちに課せられた最重要課題です。

内 容

○主 張	1
○特集「147年の歴史に幕を下ろした二つの小学校」	2
○提言「復興に向けた創意ある教育」	3
○学区紹介「地域とともに」	4

○特色ある教育活動	7
○仙台市小学校教育研究会より	10
○退会者からのメッセージ	11
○新任校長所感	20
○編集後記	24

特集 147年の歴史に幕を下ろした二つの小学校**作並小学校****仙台市最西端の桃源郷**

古元 良和（上愛子小学校）

令和2年3月31日（火）が最後の出勤日であった。平成31年度末をもって閉校、大倉小学校とともに、上愛子小学校と統合した作並小学校は、明治6年に開校し、大正、昭和、平成、そして令和と五つの元号の時代にわたり147年の歴史を刻んできた歩みに終止符を打った。

学区内には県内でも有数の温泉があり、作並けしも有名な作並は、歴史と豊かな自然と文化、心温かい地域の人々に抱かれながら、多くの子供たちを育ててきた。新川にあった分校は、東日本大震災以後は休校となった。閉校時の在籍児童は19人であったが、最大360人の児童が在籍した時もあった。

豊かな自然と伝統文化、優れた地域の人材を有効に活用した教育活動を展開しており、保護者と地域の方の理解と協力を得ながら故郷を愛する子供たちを育ててきた。

最終年度は、「ありがとう作並小学校 新川分校」をスローガンに掲げ、計画した年間行事を全て無事に執り行うことができた。残す行事は閉校式、卒業式、修了式というとき、2月27日の夜に安倍首相の全国学校休校要請が出され、3月2日からの臨時休校となった。子供たちにとって、学校にとって地域にとって大きな節目となるこの三つの行事は、何が何でも行いたいというのが全職員、保護者、児童、地域の方の悲願であった。地域の方をお呼びすることはできなかったが、規模を縮小して行った。

春は新緑、夏は川遊び、秋は実り、冬は雪遊びと作並のシンボルのゴリラ山（鎌倉山）に見守られ、一人一人の実態と学びの足並みに寄り沿ったきめ細やかな指導、地域の愛情に包まれて育った子供たちには、コロナへの脅威以上に地域を愛する心と態度が育っていることを信じて疑わない。

教育の原点、一人一人の実態に合わせてたくましく、しなやかで賢く心豊かな児童を育てる環境がなくなってしまうことには寂寞の念を覚えざるを得ないが、この地球的規模の大災害を賢く力強く思いやりの心を持って乗り越えて、新たな学習環境で更に自分らしく力を伸ばして欲しいと思う。

大倉小学校**多くの人々から愛され続けた小さな学校**

工藤 良幸（南光台東小学校）

大倉小学校の歩みを記した学校沿革史をひも解いてみますと、その歴史は誠に古く、開校は明治6年に遡ります。切払の地にあった私塾「日新塾」を母体として誕生した大倉小は、その後、明治・大正・昭和・平成・令和という五つの時代を歩み続け、147年の歴史に幕を閉じました。この間、校地の移転や五つの分校の設置、市町村合併等による度重なる校名変更を繰り返しながらも、多くの卒業生を世に送り出し、輝かしい教育の歴史を創ってまいりました。中には、大倉ダムの建設による家屋の移転等、様々な困難があったこととされますが、「全国僻地教育研究大会」「県国語科公開研究大会」「環境学習に対する環境庁長官表彰」「ダム清掃継続活動に対する国土交通大臣表彰」「父母教師会県教育功績者表彰」など、様々な分野で全校を挙げて取り組んできた実績が沿革史に刻まれております。これもひとえに、歴代校長と教職員による熱意に満ちた教育活動の推進、父母教師会や地域の方々からの多大な御支援・御協力の賜物であると言えます。

大倉小で教べんをとられた教職員の皆様にとっては、四季が彩る美しい自然の下で、保護者や地域の皆様の学校に寄せる熱い思いと深い愛情、そして何よりも子供たち一人一人の純真な目と心に、しっかりと向き合いながら日々の教育活動ができたことは、この上ない幸せを感じた数年間だったのではないのでしょうか。

大倉小では、「定義太鼓」「定義祭り」「田植えや稲刈等の農業体験学習」等の特色のある教育活動が行われてきましたが、これらの取組を通して、子供たちは地域の皆様に心から愛され、誠に温かいぬくもりの中で、大倉の良さを知り、大倉を愛し、大倉の地を誇りに思う気持ちを育んでまいりました。

以上のように多くの人々から愛されてきた大倉小が、児童数減等の諸事情から閉校となったことは、誠に無念であり、惜別の極みであります。大倉小の良き伝統と「大倉魂」と称する校風が、上愛子小学校に引き継がれ、ますます発展されることを心から願っております。

提言

復興に向けた創意ある教育

東日本大震災を経て、本校においても、地域住民及び保護者と共に、防災訓練を実施してきた。立町小学校指定避難所運営準備委員会を立ち上げ、各町内会と連携しながら、以下の3点をねらいとして、地域の方々と共に合同防災訓練や避難所開設訓練を行っている。

- 東日本大震災の教訓を踏まえて、大きな災害を想定した防災訓練を実施することにより、「自助」「共助」の意識を高める。
- 非常災害時における「自助」「共助」のための知識及び技能を身に付ける。
- 非常災害時に備えて、学校や家庭、地域の役割を確認し、組織的に対応できる「災害に強い町づくり」を構築する。

また、学区内には土砂災害が起こる可能性が高い地域があり、そのことを知らない児童も多く見られることから、地域を知り、家の周りや様子を知り、災害時の行動を家族と確かめ理解することの重要性も高まってきている。そのためにも、地域と手を携

I like my town.

第2地区会長 小澤 守一（立町小学校）

えた取組を更に充実したものにしていきたいと考える。

あわせて、毎月11日前後に故郷復興プロジェクトデーを設け、「愛のあいさつ運動」を実施している。学年ごとに割当てを決めて、朝の時間に各学年児童全員が校門前に立ち、地域へ向けて元気を届けている。

昨年度、令和2年を迎え、冬休みが明け、新年の学校生活のスタートを切った1月のとある日、6年生の外国語の授業「I like my town.」を参観する機会があった。立町学区の良いところと、ほしい施設を紹介し合う（もちろん英語で）という内容であったが、子供たちは本当に楽しそうに、自分たちが住んでいる地域の良いところを紹介し、より良い未来に思いを巡らせていた。その様子から子供たちの自分たちの住む地域への思い、そしてその子供たちのすてきな笑顔からは、地域の方々からの子供たちへの温かい思いが感じられた。

「復興は地域とともに」「地域とともに歩む学校」という思いを強くした瞬間であった。

提言

復興に向けた創意ある教育

震災後9年目の取組について思うこと

第4地区会長 八島 雅人（小松島小学校）

閉校となった東六郷小は、「ひがろく」の愛称で親しまれてきた。平成23年4月の朝、私は着任する「ひがろく」の光景を忘れまいと、被災した校庭を眺めていた。大破した車、倒木、コンテナなどの瓦れきを見て、自分は何ができるのだろうと考えていたことを今も覚えている。

震災当時、小松島小学校には1,500人以上が避難したとの記録がある。9年経った今、廊下の壁にあるひびの痕跡以外、当時を感じさせる物は残っていない。一方、地域との関わりは昔から強く、地域防災訓練は、学校と地域合同で毎年行っている。（ただし、今年度は新型コロナウイルス感染拡大防止のため、実施を見合わせている。）

地域防災訓練は、まず、第一次避難場所から地区ごとに学校へ避難するところから始まる。その後、高学年児童が地域の方々と一緒に救命法や初期消火等を学び、低中学年児童は、教室で「仙台版防災教育」を学習する。最後は、全員で消火訓練等を見学し、炊き出しのご飯をいただいて解散となる。地域

と一体となっていくこの行事は、地域との連携を図る上でも重要な役割を担っている。

学習では、学習内容の般化や定着を図るため、「朝の活動」の時間に「防災スキル」の学習を年間6回程度設定している。誰もが使えるように資料が準備されているので、教室ですぐに実践できる。

また、今年度は5年生が、震災遺構「荒浜小学校」での学習を予定しており、より実体験に即した学習ができるものと期待している。

前述した「ひがろく」の校舎は既に取り壊されているが、隣にコミュニティセンターと津波避難ビルが建てられた。避難ビルから周囲を眺めると、約2km先に海が見え、周囲に高い建物もないことから、津波の脅威にさらされたことが想像できる。現場で想像力を働かせるような体験型学習を大切にしたいと感じている。

災害は、どんな状況でも起こりえる。今年度は、新型コロナウイルス対策の中で進める防災教育について、校長の役割を果たしていきたい。

提言

復興に向けた創意ある教育

命を守る防災教育「荒町小防災の日」

第6地区会長 佐藤 潤一（荒町小学校）

東日本大震災より9年半が過ぎました。震災からの教訓を風化させない取組が毎年行われる一方、震災に対する意識の格差が心配される今日この頃です。東日本大震災後も、地震のみならず、暴風雨や土砂災害などの大きな自然災害が各地で起こっており、その対応は喫緊の課題だと考えます。

災害の発生率を見たときに、在校時に災害が起こる確率は約2割程度で、残る8割は家庭に居るときに起こっています。

本校学区内では、高層マンションや戸建て、川沿い（土砂災害警戒区域）や山沿いなどで住環境が大きく異なります。そのため、子供たちの命を守るには、在校時はもちろん、在校時以外（登下校中、休業中、夜間など）の各家庭の状況に合う細やかな対応が必要となります。

そこで本校では「荒町小学校区防災マップ」を作成し「避難対応マニュアル」を毎年見直しています。

また、東日本大震災発生時には、本校体育館及び教室に、避難者1,300名以上を受け入れたことを踏まえて、安全・安心な避難所運営の在り方も、避難所運営委員会で毎年検討しています。

災害は起きた時、学んだ知識、技術はもちろん、判断力、決断力、実践力、道徳力等が試されます。その力を育成する「防災教育」として、本校では「荒町小防災の日」を設け、指導を続けてきました。

その主な活動内容は、

1 仙台版防災副読本を活用した授業

「自分の命は自分で守る」携行カード（児童用、保護者用）、「荒町小学校区防災マップ」の活用

2 ゲストティーチャーによる出前授業

仙台市防災リーダー及び防災活動団体、若林区中央市民センター職員、消防署員による防災授業

3 地震を想定した避難訓練、及び、児童引き渡し訓練

です。この日はフリー参観とし、御家庭や地域の皆様にも学びや活動を参観していただきます。

家庭に帰ってからは「家族防災会議」で、指定避難場所や、自宅に入れない場合の対応などを、家族で共に確認していただく時間も大切にしています。

この取組を通して、防災意識を風化させず、大切な「命」を守る行動ができるよう、学校・家庭・地域あげて、今後とも取り組んでいきたいと思います。

学区紹介 地域とともに**地域が子供を育てる学校**

庄子 裕（湯元小学校）

湯元小学校は、秋保温泉旅館を間近に望む校庭で、子供たちが毎日虫採りをして過ごす、自然豊かで歴史ある学校です。今年度の児童数は86名で、今年開校70年目を迎えます。学校の前を名取川が流れ、石垣として使われる「秋保石」の採石場と秋保電鉄の名残が学区に残っています。

湯元小学校の特色ある教育活動は、湯元田植踊を教育課程に取り入れているところです。秋保の田植踊（馬場、長袋、湯元）は、平成21年にユネスコ無形文化遺産に登録されました。湯元田植踊は、藩主にお座敷で披露していた伝統芸能で、今は、5月の薬師祭で子供たちが奉納をします。

学校には、年に10回ほど、「湯元田植踊保存会」の皆様が来校し、全校児童に指導しています。6年生になると下級生を指導できるまでの腕前になり、4年以上全員が学芸会で発表します。この活動を続けてきたことで、愛校心や地域との結び付きを大切に

思う気持ちはもちろん、上級生が下級生の面倒を見るのが当たり前という湯元小の伝統が育ち、受け継がれています。

5年生になると、本物の田植えも行います。田植えの講師は、「湯元パラダイスクラブ」の会長さんです。「湯元パラダイスクラブ」は、スキー教室やPTAのお祭り、クリスマスリースやしめ縄作りで活躍している地元ボランティア団体です。

「湯元田植踊保存会」と「湯元パラダイスクラブ」の他に、各町内会や子ども会育成会や児童館、温泉組合の皆様が、子供たちが楽しめる行事を企画し、防災行事や交通安全を守る活動も指揮していただいています。子供たちは、いざというときに、上級生、保護者、そして地域を頼りにできるのです。

朝に巡視をしていたときに、地域の方から「子供たちのことは毎日見でっから大丈夫だよ、校長先生」と力強い言葉をいただいたことがありました。このような地域ぐるみで子供を育てているすばらしい地区に感謝し、学校ができることはしっかりやらずにはと考えると、全職員が力を合わせて、学校経営を行っています。

学区紹介 地域とともに

「沢っ子」と呼んでくださる
地域の方々と共に

菅原 孝代(大沢小学校)

大沢小学校は明治6年に長泉寺を仮校舎として開校しました。今年で開校147年となる歴史ある小学校です。住所の「芋沢」という地名は、長くておいしい自然薯が収穫できる土地であったことに由来すると言われています。古くは徳川の殿様に「伊達の芋は日本一！」と賞賛されるほど美味だったそうです。その自然薯を掘った後が「沢」になっているというお話も地域の方から伺いました。

「大沢」という地名通り、丘陵地帯が多い学区で、昨年の台風19号の折には、みやぎ台団地方向から流れてくる大量の雨水に驚かされました。学校前の通学路はまるで川のように。また、田園地帯を流れる小さな川もあつという間に濁流となり、それは、早めの避難の大切さを痛感させられる光景でした。

昨年度は、連合町内会長様をはじめとする地域の方々と行政の方々、そして学校とで、1年に6回程度の避難所運営に関する話し合いを重ねました。

「顔を合わせて話すこと」は本当に大切です。避難所開設時には打合せをしたとおり、それぞれがスムーズに動くことができました。地域の方々は、災害時、特に大雨時の大沢地区を知っていたからこそ、話し合いを大切にしてきたのだと感じました。

大沢地区の地域の方々の学校に寄せる思いは熱く、毎年のべ1500名を超える方々に学校ボランティアとして御協力をいただいています。大沢小では学校ボランティアの皆様を「沢っ子支援隊」と呼んでいます。まさに「ワンチーム」。本当にありがたいです。読み聞かせボランティア・防犯ボランティア・折り紙ボランティア・外遊びボランティア・ミシンボランティア・ピアノ伴奏ボランティア・水泳ボランティア・草刈りボランティアなど昨年度は地域の皆様に毎日のようにお世話になっていました。

感染症対策のため、現在のところ、校内で地域の方と触れ合う機会がなくなっています。また、地域防災の話し合いも開催できない状況となってしまいました。「沢っ子」のために心を寄せてくださる地域の皆様のために、今だからこそできる新しいつながり方を考えて実践していきたいと考えています。

学区紹介 地域とともに

「野」に咲く花のように たくましく
笑顔輝く 子供たちに

佐藤 康隆(野村小学校)

野村は「野」という名前の村で、それが「野村」になりました。西北は七北田村に接する高森山の山麓を境とし、東南は大きく蛇行している七北田川を境とし、河岸段丘に農家が点在する村でした。(仙台市ホームページ「いずみ史跡今昔物語ー第9回野村めぐり秀衡街道を歩く」より)

明治22年、市名坂村、七北田村、松森村、北根村、荒巻村、上谷刈村、古内村、野村の8か村が合併して七北田村になりました。さらに、昭和30年に、根白石村、七北田村が合併し泉村となり、昭和32年泉町、昭和46年泉市となり、昭和63年に仙台市と合併し現在に至ります。

野村小学校は、明治6年の上谷刈小学校(上谷刈、古内、野村、実沢の4か村が学区)開校から始まり、昭和31年に泉村立野村小学校として独立しました。独立当時は6学級234名の児童が在籍していましたが、その後高森小学校、加茂小学校の開校で児童が転出し児童数は減少しました。さらに野村地区を含

む泉区西部は人口減少が進み、令和2年度の野村小学校の全校児童は32名です。

このように、地域の子供の数が減少していく中で、小学校として、この地区で何か目玉になる活動ができないかということを考え、平成28年度に「野村若草太鼓」を発足させました。子供たちが自信と誇りを持てるような活動をさせたいという当時の職員の熱意が形になりました。

総合的な学習の時間の「自分づくり」に位置付け、教育実践を行いました。発足当時は6年生の取組とし、学習発表会での演奏を目標にしました。その後、5・6年生の取組になり、令和元年度からは全学年で発表できるバージョンも取り入れました。毎年、1・2月には6年生が4・5年生に伝承する時間を設けることで、縦のつながりも強くなってきました。

発表の機会は、校内においては「運動会のオープニング」「学習発表会」「6年生を送る会」、校外においては「野村地区敬老会」「須賀神社お祭り」「JA野村お祭り」「七北田中学校音楽祭」「泉中央市民センター“遊びの天国”オープニング」などです。野村小学校と言えば「野村若草太鼓」というフレーズが定着してきました。

学区紹介 地域とともに

これからも田子地区とともに歩む
学校を目指して

佐藤 俊明（田子小学校）

開校当時の田子小学校は豊かな緑と田園に囲まれ、北西には泉ヶ岳がそびえ立ち、職員室から見える新幹線が新しい時代を感じさせてくれたそうである。

本校は、仙台市の東北部に位置し、昭和62年4月高砂小学校より分離・開校した。東側には七北田川が流れ、毎年白鳥が飛来する。平成8年度より宅地分譲が開始され、近郊都市化が進展してきた。

東日本大震災後、田子地域では平成27年度までに復興集合住宅や災害公営住宅が建設され、被災した各地域から多くの人々が転居されてきた。この時期に転入生も一時期急増したが、現在は落ち着きを見せている。新たな町内会や子供会ができる中で「学校のため」「子供のため」と様々な御支援をいただきながら、地域とともに本校は歩んできている。

田子地区の特色ある活動の一つに、地域の町内会と関連機関など合同での田子地区地域防災訓練の取組がある。田子市民センターが中心となって田子町

内会と高砂町内会、学校関係者、消防署、地域包括センター、民生委員児童委員が一堂に会し実行委員会を結成し運営する。訓練当日、小学校では授業参観で防災授業を実施し、その後児童は担当職員、保護者と共に一時避難場所へ避難訓練を行った後、各町内会で計画した防災に関する研修や訓練に参加する。各町内会の防災意識は高く、毎年趣向を凝らした取組を実施している。

田子地区では、近年の異常気象により水害の被害もますます深刻な問題となっており、理科や社会科の学習で水害に関する防災教育を進めている。過去の地域の水害の状況を学んだり、避難の判断や場所について話し合ったりする学習を通して、人と人との関わりや命の大切さを学ぶ機会ともなっている。

変化の激しい社会の中で、この田子地区も開発が進んできたが、相手を受け入れる土地柄は今も健在であり、本校の重点目標に掲げ取り組んでいる「思いやりがある子ども」は、保護者、地域とともに目指すべき児童像であると確信している。これからも、多くの方々が築き上げてきた田子小学校を、地域の方々と共に発展させていきたい。

学区紹介 地域とともに

地域との連携・協働を目指して

有馬 玄康（東四郎丸小学校）

本校は、開校当初から学校と地域との結び付きが強く、地域と連携・協働しながら様々な取組を行っています。学区は仙台市の南東部に位置し、北側は名取川、南東側は名取市閑上地区に接しています。

東日本大震災時には、学区の一部が津波により浸水し、閑上地区や地域の住民が多数避難してきたそうです。また、学区一帯は市の浸水想定区域に指定されています。そのため地域の防災意識は高く、平成25年度に本校で仙台市総合防災訓練が開催されたことを機に、毎年2回、学校と地域の合同防災訓練を実施しています。

6月の訓練は、土曜日に多くの地域の方々や関係機関の御協力のもと、地震・津波対応避難訓練や親子防災教室、児童引渡し訓練などを行い、5年生親子は「そなえゲーム」に取り組みます。「そなえゲーム」とは、震災後、本校学区のある東中田地区から生まれたゲームで、プレイヤーが架空の地域の住民

になって、災害に備えるために必要なことやできることを考えながら実践的に学ぶボードゲームです。ゲームの中で「日頃からの備え（自助）」と「人のつながり（共助）」を親子で考えることを通して、防災に対しての意識が自然と高まっていきます。

さらに昨年度は、地域の方々と共に防災備蓄倉庫の備品の点検や地域防災マニュアルの見直しも行いました。その訓練の成果は、昨年台風19号の避難所開設の際に発揮され、地域の運営委員の方々の主体的な活動により、80名弱の避難者の受け入れや運営を円滑に進めることができました。

本校の学区には信号機が一つ也没有ません。幸いにもこれまで大きな事故は起きていませんが、地域の方々に「閑上地区の復興に伴って朝夕の交通量が増加し、特に登校時の安全確保が課題だ」という旨の話をしたところ、早速、各町内会で人員を増やしていただき、課題の共有化を図るとともに登下校時の見守り活動を強化させることができました。

これからも、防災教育を要に地域・家庭との連携・協働をより一層深め、社会に開かれた教育課程の充実に向けて取り組んでいきたいと思っています。

特色ある教育活動**地域の教育資源を生かした教育活動**

後藤 景子（八木山小学校）

1 はじめに

本校は、昭和46年、向山小・鹿野小・西多賀小の3校から652名で開校し、今年度開校50年目を迎えた。学区は西部に奥羽山脈を眺め、南東はるかに太平洋を望む仙台市南西部の丘陵地にある静閑な住宅地である。近くに八木山動物公園や青葉城址、仙台赤十字病院や東北工業大学、郵政研修所、東北放送、八木山ベンীランド等があり、文化財に恵まれているため、地域の教育資源を生かした教育活動を展開している。

2 特色ある教育活動について**(1) 本校と八木山動物公園との交流**

八木山動物公園とは開校以来、様々な交流をしてきている。開校当時、「動物公園から動物の糞尿を譲り受け教材園や植物園の土作りをした」という記録が残っている。

ここ数年は、1・2年生が春の遠足、3年生が総合的な学習の時間で『動物の秘密を探ろう』の学習、5年生が総合的な学習の時間で『ゾウの糞で野菜を育てよう』の学習活動を行っているとともに、全校児童が『全校奉仕活動』として休園日の動物公園で学年部ごと、清掃や環境整備のお手伝いの活動を行っている。

特に、通称：ゾウ糞エコサイクルは、平成20年度、動物公園からの要請により、『ゾウの糞で野菜を育てよう』の授業を行い、それ以降毎年5年生がこの授業に取り組んでいる。象の糞から作った堆肥を用いて 野菜（ニンジン）を栽培し、収穫物を象に食べさせる体験を通して、自然界の物質の循環や資源リサイクルの重要性に気付かせるのがこの学習のねらいである。

**(2) 本校における勤労生産・奉仕的行事について**

本校で実施していた勤労生産・奉仕的行事は、八木山動物公園での奉仕活動を実施する以前は、夏季休業後に行っている『除草活動』（1時間）

のみであった。前述したように、毎年1・2・3・5学年が八木山動物公園で学習を行っている。「地域の諸施設を生かした特色ある教育活動」として八木山動物公園での教育活動を考えた際、1学年から6学年までの学習の連続性を更に確かなものにするための活動として、全校での奉仕活動を行うこととなった。

(3) 全校奉仕活動実施へ

以上のような経緯から、本校が八木山動物公園に要請する形で、平成22年度から八木山動物公園において全校奉仕活動を実施することとなった。

・日頃お世話になっている動物公園に対する感謝の気持ちを込めて奉仕活動をする。

・自分たちが生活する地域や公共施設を、より良くしていこうとする自覚を高める。

の2点をねらいとして学年部ごとに2時間ずつの活動を行っている。

内容は、本校担当者が動物公園の担当者と事前に打合せを行って決定しており、これまでの活動



例としては、1・2年生：園路のごみ拾い、3・4年生：花壇とプランターへの花苗の植付け、5年生はキリン舎裏の管理用通路、6年生は園内看板

等の清掃や東門門扉の清掃を行ってきた。

3 まとめ

豊かな自然と教育資源、そして多くの地域の方々の協力に恵まれた本校では、金剛沢緑地（通称：恐竜山）での活動でも、仙台森林アドバイザーの会の方々に御指導や御助言をいただきながら、森林や植物の観察と自然保護について学ぶ機会を得ている。

校長として、子供たちがこの恵まれた地域の自然や環境に感謝の気持ちを込めて活動することや、自分たちが生活する地域を、より良くしていこうとする自覚を高める活動をより一層推進し、子供の生きる力へつながら特色ある学校づくりに取り組む所存である。

特色ある教育活動**「自然」、「歴史」、「福祉」が織りなす学校教育を目指して**

武田 早苗（柞江小学校）

1 はじめに

本校は、仙台市中心部からほど近く、仙台市ガス局や消防学校などの公的施設やイオンモールなどの大型商業施設、病院などが数多く立ち並ぶ地域にある。この地では奈良時代に多賀城や陸奥国分寺に奉納した瓦を焼いた窯が発見されている。学校の敷地内からも窯跡4、竪穴式住居跡2、堀立式建物跡1が発掘されており、近隣を含めると当時の様子をうかがわせる遺跡や遺物が多数発見されている。

また、地域には沼や森が点在し、学校の西側に与兵衛沼、東側に柞江の森を配している。学校周辺は保存緑地となっており、街中にありながらも多くの自然が保たれている。

さらに、障害者福祉施設や養護老人ホーム、児童養護施設などの福祉施設や高等支援学校があり、日常的に高齢者や障害を持った方々と触れ合う機会も多く、実体験を通して福祉や助け合いの精神を学ぶことができる環境にある。

2 特色ある教育活動**(1) 自然環境を生かした学習活動**

本校では、5年生の総合的な学習の時間に柞江の森の自然観察や保全活動を行っている。この活動は、仙台市建設局百年の杜推進



部が手がける「百年の杜づくりプロジェクト推進事業」としても位置付けられており、自然保全のプロである森林組合の方々に御指導をいただきながら、樹木の伐採作業に取り組んでいる。作業を通して、森全体が十分な光合成を行えるよう、定期的に枝や下草をはらうことが重要であることや、落ち葉や倒木も次の命を育む循環に必要であること、森に生息する昆虫や野鳥などがバランスを図りながら生態系を維持していることなど、自然の営みをじかに体感でき、地域の財産である森を守り続けていくために自分たちができることを

考える貴重な学習となった。

この活動には、隣接校である幸町南小学校5年生も参加し、協力して作業を進めることを通して交流を深めた。

(2) 地域の歴史をたどる学習活動

本校の職員玄関には、与兵衛沼の水抜きをした際に発見された瓦が数体、展示されている。これらは、奈良時代に多賀城や陸奥国分寺に奉納されていた瓦とされており、窯場を再現したミニレプリカもある。本校の3年生は、総合的な学習として、地域の歴史をたどり、当時の人々のくらしや、生活の工夫などについて考えを深める学習に取り組んでいる。昨年度は文化財課の先生にお越しいただき、学術的にも貴重な遺跡であることを教えていただいた。子供たちにとって、自分たちが住む地域の良さを再発見する貴重な授業となった。

**3 おわりに**

上記の他にも、特別支援高等学校との交流会や障害福祉施設入居者を招いての児童会まつりを実施している。その中で子供たちが高等学校生や障害者の方々から教えていただく事も多く、互いの支え合いの大切さを学ぶ場にもなっている。(令和元年度～2年度は校内事情により休止)

本校区は決して広くはないが、子供たちが体験を通して豊かに学ぶ環境に恵まれている。子供たちは、身近な自然や歴史、地域の人々と関わりを通して、地域の一員としての自覚を培い、未来を担う上での大切な心情や知識を育んでいる。今後も豊かな人間性を備えた大人に成長できるよう、創意工夫を凝らしながら教育活動を展開していきたい。

特色ある教育活動

おもてなしの心は思いやりの心

稲葉 俊一（幸町小学校）

1 はじめに

本校は、仙台駅から3キロ圏内の市街地にあり、県の公団住宅、市営住宅、民間の中高層マンションが密集している地域である。家庭環境は、共働きのサラリーマン家庭が多い。地域は、連合町内会、体育振興会を核として、学区民運動会、納涼祭などの活動が学校、地域、PTAの三者が協働して行われている。また、地域は学校に協力的で、学校支援地域本部事業に多くの地域ボランティアの協力をいただいている。

本校は、平成26・27年度の2年間、国立教育政策研究所教育課程研究センター指定事業を受け、伝統文化教育の研究を続けてきた。現在では、伝統文化教育が本校の特色ある教育活動の一つとなっている。

2 伝統文化教育の概要

伝統文化教育は、校内研究として平成30年度まで5年間続けてきた。現在では、伝統文化教育の取組を各教科・領域と関連させ、カリキュラムの中に位置付けて通常教育活動として取組を継続している。

(1) お茶を題材にした取組

低学年は、生活科の中で外部講師を招き、校庭にあるお茶の木から茶摘み・蒸し・もみ・乾かして飲む活動まで行う。2年生は、煎茶の入れ方を学び、1年生やお世話になった地域の方々を招待して、煎茶を振る舞う交流活動を行っている。

中学年は、総合的な学習の時間の中で外部講師から茶道について学び、お茶を点てる茶道の体験活動を行っている。4年生は、3年生を招きお茶会を開き、おもてなしの心を学ぶ機会としている。

高学年は、入学式や卒業式の来賓の方、国際理解教育で招待した外国の方など、来校された方々にお茶を点て、お茶を振る舞いお茶について学んだ成果を発表する場としている。

(2) 能楽の取組

本校では、4年生以上の総合的な学習の時間に能楽を取り入れている。4年生は、能を実際に鑑賞して、能楽について学習する。

5年生では、特別非常勤講師（観世流の能楽師）から、声の出し方、扇子の扱い方、礼の作法など、

能楽を体験しながら、実際に舞方を学んでいる。

6年生では、山形県鶴岡市に神事として伝承されている黒川能について、修学旅行で出向き、能楽について学びを深めている。

(3) 和食への取組

中学年では、和食について学んでいる。3年生は、大豆を学習材として、豆腐づくりやみそづくりを行っている。昔から伝わる和食の良さや先人の知恵のすばらしさを学ぶ機会としている。4年生では、煮干しを使ったみそ汁を作り、だし文化について学んでいる。みそ汁には、3年生で作ったみそを用いている。

(4) その他

和楽器体験として1年生は、昨年琴の体験学習を行った。高学年では、音楽の学習として、仙台三曲協会から講師を招き三味線、箏、尺八の体験学習を行った。

また、文化芸術による子供の育成事業巡回講演事業を活用し、能楽、講談、和楽器による朗読劇など、全校児童で鑑賞できるようにしている。

3 おわりに

本校では、立ち止まりお辞儀をしながら挨拶をする児童の姿が見られる。伝統文化教育の積み重ねが、日本的な所作や日本文化を感じることに繋がってきている。

また、お茶を通じた交流やお茶会は、人をもてなすことにつながり、もてなしを受けた方からの賞賛の言葉は、子供たちの自己有用感を高めている。「おもてなしの心は、思いやりの心」子供たちに人を思いやる心が、確かに育まれてきている。

伝統文化教育で行っている全ての活動は、外部講師の方々や活動をサポートいただいている学習ボランティアの方々に支えられている。保護者の皆様と地域の方々の御理解と御協力、そして、本校の取組に賛同し御指導いただいている外部講師の皆様感謝し、今後も本校の特色ある教育活動である伝統文化教育を継続しながら、おもてなしの心を育てていきたいと考えている。

仙台市小学校教育研究会より

仙小教研の諸活動を見直す一年に

仙台市小学校教育研究会 会長 村田 隆則（国見小学校）

1 はじめに

仙台市小学校教育研究会は、会則第3条に「本会は仙台市小学校教育振興のため各部会の連絡提携をもとに、研究活動の推進を図ることを目的とする。」と掲げ、昭和39年3月から現在に至るまで仙台市教職員の研さんの場を提供してきた。また、各部会長の校長先生方のリーダーシップのもとで各種大会の開催を始め、部会独自の研修会、児童参加の各種展示会やコンクール開催など様々な活動を推進してきた。これまで各研究会が積み重ねてきた成果に感謝を申し上げたい。

2 今年度の活動について

今年度も教員の研修、児童参加の各種行事に各部会で力を尽くそうと準備を進めていたところである。しかし、新型コロナウイルス感染症拡大に伴い、宮城県小・中学校長会長及び仙台市小・中学校長会長からの依頼もあり、今年度1年間は第一・第二部会とも教員の研修に関わる部分について、活動を休止せざるを得ない状況となった。

児童が参加する各種展示会やコンクールについては、感染予防に配慮し、可能な部分について、実施を予定している。このことについては、現在各部会長に確認中であり、まとめ次第各校にお知らせする予定である。

教員の研修については、この1年間を会員一人一人が自分の実践について見直し、校内での連携を図りながら各自の力を蓄えていく時間と捉え、実践を積み上げていく時間としてほしいと考えている。所属部会のこれまでの研究成果物をひもとき、そこから得られた知見を自分の実践に生かし、検証する活動を通して指導方法の工夫や新しい実践のアイデアを得ていく機会としてほしいのである。特に若手教員が多く勤務している学校においては、OJTの一環として、このような実践に取り組むことは、指導力向上の一つとなるのではないかと考える。

「より高みへ行くためには、しっかりとかがんで準備し、ジャンプしなければならない。」ことを心

に留めて会員各自が目標を持って今年度を過ごすよう期待している。

夏に開催される教育文化講演会は、今年度本研究会が主管となって実施予定であったが、これも中止せざるを得なくなった。共催いただく日本教育公務員弘済会の皆様、講演者の内館牧子先生には中止の判断を快く受け入れていただき、心から感謝を申し上げます。内館先生には次年度の講演について交渉中であり、来年夏にお目にかかることができることを期待している。

3 活動の更なるスリム化に向けて

仙小教研のスリム化は平成29年度から始まり、これまでに①活動内容の精選、②市教委との共催事業の実施、③常任委員数の削減、④研究集録のデータ化、⑤部会長の選任方法、常任委員の依頼方法見直し、⑥部会の統廃合、⑦文書の簡略化などに取り組み前進が見られた。

教員の過酷な勤務実態が社会的に明らかになり、働き方改革が叫ばれている。また新たにコロナウイルス感染症による対応を迫られる中、研究会の活動を更にスリム化して「教員の多忙化解消」「子供と向き合う時間の確保」と同時に「教員の学びの場の確保」を図っていきたいと考えている。

4 おわりに

仙小教研は、これまで教員の指導力向上を目指してそれぞれの場面で学校の枠を超えた組織として、仙台市の小学校児童のために貢献し、互いに切磋琢磨する場を担ってきた。教育現場に若手教員が多く配置される時代になり、若手教員の学びの場を提供するとともに、学校文化や指導技術を伝承する場として仙小教研が果たす役割は今後ますます大きくなるであろう。各部会においては、このような時代の流れをいち早く感じ取り、今年1年、次なる一手はどのような活動かを考える時間としてほしいと願っている。

退会者からのメッセージ

後輩に期待すること



『感性』と『想像力』を

三塚 修（前 東二番丁小学校）

3月に入り、新型コロナウイルスの影響で突然の休校、極めつけは職員と6年生のみの卒業式、加えて修了式、離任式中止など、異例尽くしとなった今年の年度末。未だウイルス収束の兆しは見えず、4月からの新学期が無事に迎えられるのか、心配の種は尽きない。1000年に一度と言われた9年前のあの東日本大震災をはじめ、ここ数年は台風やゲリラ豪雨の脅威に毎年さらされている。他方、いじめや自死、保護者や地域住民からのクレーム、学校事故防止等々、学校の危機管理は多様性を増し、時には複数同時進行するケースも少なくはない。

このように近年の危機管理はこうした予測不可能な事態が起こり得る可能性は確実に高まり、その判断が一層難しくなっている。そこで、こうした突発的な危機に対応するためには、日頃から『感性』と『想像力』を高めることが重要と考える。目の前の出来事や事案から、そこに潜む危険や今後起こり得る危機をどれだけ敏感に察知し感じ取ることができるか。さらには、自ら判断し下した決断がより適切な選択となるため、いかに多方面から結果を想像し予想し得るかが重要な鍵となる。

休み時間、児童が一人で読書をしている姿を、単に「本好きな子」と捉えるか、そこにいじめや仲間外れの匂いを感じるか、その感性の違いが、大きな分かれ目になるのではないか。

復興へ向けて大きな一歩

鈴木 一彦（前 南材木町小学校）

平成25年4月1日、東日本大震災後に発生した津波で地域や校舎が被災し、六郷中学校の1階に併設された東六郷小学校に着任しました。

日常の学校生活はいろいろと制約がありましたが、子供たちが笑顔で学校生活を送れるように教育活動をしていこうと、教職員と一緒に実践を積み重ねました。

子供たちには、成長の過程で、大震災のことを聞かれた時に、自分の言葉で大震災当時のことなどを語る人に成長してほしいと思いました。そのために少しずつ復興に向かって歩み出すきっかけになればと思い、『故郷教育』をテーマに、校内研究に取り組みました。

田んぼ脇の用水路に、ザリガニやドジョウを見つけて大きな声を出していた子供たちに、故郷・東六郷の復興の様子を肌で感じさせることができ、復興に向けての大きな一歩を歩みだしました。

大震災発生直後から、小学校長会、地区会、専門部会、仙小教研各部会の校長先生方から、多くの御支援と温かい励ましをいただき、心から感謝申し上げます。

東六郷小学校は、平成29年3月31日をもって閉校して、4月1日から六郷小学校に統合されました。

校長会の絆を感じて、対応することができました。校長会のますますの御発展を御祈念いたします。

出合いに感謝

猪股 由美子（前 東六番丁小学校）

判断を迫られたとき、これまで御指導いただいた多くの校長の姿から学んできたことが、教頭、校長になった自分の支えとなりました。東日本大震災では、児童の安全を最優先に考えながら、避難所となった状況からどのように学校を再開していくのか、当時の校長を先頭に教職員が一丸となって取り組んできました。その後の大川小学校の裁判では、学校や校長には、児童の安全確保のために、地域住民よりもはるかに高いレベルの防災知識や経験が求められました。子供たちの命を預かる学校現場の責任の重さが示された判決でした。震災から9年が過ぎ、子供たちには震災の記憶がなく、若い教員には、震災時に対応した経験がありません。さらに、地震以外にも台風や大雨など、これまでに経験したことのない災害が多発しています。そして、新型コロナウイルスへの対応、学校では、様々なことを想定していなければなりません。「想定外だった」とは言えないのです。判断しなければならないのは校長ですが、それまでに多くの声に耳を傾け、様々な思いを受け止めることを大切にしてきました。また、校長会の皆様からは、多くの御助言をいただきなんとか校長としての務めを果たしてきました。

38年間の教職生活の中で出会った多くの皆様に心より感謝申し上げます。ありがとうございました。

自燈明，法燈明

今野 孝一（前 上杉山通小学校）

コロナウイルス感染予防のため3月から臨時休校となり、子供たちとの生活に突然このような形で終止符が打たれようとは予想していなかった。しかし、9年前にも女川で東日本大震災による津波を受け、自衛隊のヘリコプターで風呂敷に包んだ卒業証書だけを持って避難し、石巻商業高校の教室で卒業式を挙げた時のことを思い出した。

最後の卒業式は卒業生と教職員だけとなった。大

きいランドセルを背負って入学した可愛い姿から6年、成長した子供たちの様子を保護者の皆様はさぞ御覧になりたかっただろうと断腸の思いであった。子供たち一人一人に卒業証書を手渡ししながら、校長職の重さを改めて感じた。

校長は、学校を導く船頭でもあり、ムードメーカーでもある。大震災やコロナウイルスなどの時に、校長自らが慌てて浮き足立ってはいなかっただろうか。平時にはもちろん、大変な時にも職員や子供たちから頼りにされ、愛される校長を目指してきたつもりだが、道半ばで終わってしまった感が強い。

私は優柔不断なので様々な場面で迷うことが多かった。そういう時は、いつも「自燈明，法燈明」を大切にし、周りの人の意見によく耳を傾けて判断してきたように思う。

子供たちのために 創造と挑戦を続ける校長会

猪股 亮文（前 榴岡小学校）

子供たちの命を守り抜くことは私たちが果たさなければならぬ何よりも重い責務です。子供の生命や安全を守るためには、即刻判断を下さなければならぬ自然災害への対応などの危機管理、じっくり時間をかけて醸成する必要がある防災対応力育成など、学校の最終責任者である私たちに課せられた問題の解決はまさに待ったなしの状況にあります。

校長には、トップリーダーとして先を見て今を考える先見性や多様な意見や考え方を調整する能力、変化を察知する鋭敏な感覚、学校内外から広く情報を収集する能力、問題の発生を予知し未然に防止する能力等、多岐にわたる資質・能力が求められており、それらを培うための不断の自己研さんが欠かせないものとなっています。校長会は、各々が眼前の業務対応に忙殺される日常に身を置こうとも、「子供たちのために」という理念を忘れることなく、親和と協働を大切にしながら、子供たちのよりよい成長のためにトップリーダーとして求められる資質・能力をブラッシュアップする創造的な自己研さんに挑戦し続ける場であってほしいと切望しております。

末筆となりますが、これまで皆様方から頂戴した

温かい御厚意に深謝申し上げるとともに、仙台のこれからの教育の行く末を担う校長先生方のますますの御活躍を祈念申し上げ、結びとさせていただきます。

つ な ぐ

伊藤 敏子（前 北六番丁小学校）

東日本大震災から9年。管理職としてそのときを過ごした仲間が次々に勇退し、当時を知るには残された書物に頼らざるを得なくなってきました。校長室にある『明日の子どもたちのために―教育復興実践事例集（1巻～4巻）』は、震災復興のために各学校が取り組んだことがつづられています。ページをめくり各校の校長の思いを感じ考えてほしいと思います。（特に第4巻は、震災後の閉校等の関連掲載）

私たち管理職の着任期間はわずかです。しかし、震災を共にした当時の地域の方に会うと、その日、そして復興を口にされる方が少なくありません。地域にとって、避難所となった学校が地域の核であることを再確認した日々であったのでしょう。

「地域とともに歩む学校」として地域に支えられ私たちは学校経営をしています。着任した地域の当時のことに思いを馳せ、耳を傾け、これまでの学校と地域が歩んできたことに目を向けて、限られた着任期間での学校運営を推進していくのが私たちの任務。そして、次の校長につないでいくのが、地域への感謝の思いを伝える大切な職務であると、ここにきて感じています。

今、教育は大きな転換期。次代を生きる子供たちのため、よりよい学校経営で地域に愛される学校づくりを応援しています。

安全で安心な学校に

近澤 裕子（前 西多賀小学校）

東日本大震災の後、各学校では大規模地震発生時の想定外をなくすためにマニュアルの見直しを図ってきました。しかし、近年、台風、大雨、竜巻など地震以外の自然災害も増え、対応が喫緊の課題です。

そのほかにも、春から秋にかけての気温上昇に伴う運動会や校外学習・夏のPTAプール開放時の暑さ対策、新たな感染症対応など、学校は、これまで予想しなかった事態に次々と直面しています。

児童には、始業式・入学式・朝会等の機会を捉えて、「あ」で始まる三つのこととして「安全」「挨拶」「相手の気持ちを考えること」について話してきましたが、中でも安全は命を守るための基本です。学校の安全管理の責任者は校長であり、今後、校長には、より一層、先を見据えた危機管理能力が問われる時代になっていくと思われます。これからの仙台市の学校教育を担われる皆様には、まずは御自身の心身の健康管理に努めていただき、児童・教職員の安全安心を最優先に、学校の責任者という重責を全うされますことを御祈念申し上げます。

最後になりましたが、様々な場面で御指導、御助言を賜り助けていただきました諸先輩・同期・後輩の皆様は心より感謝申し上げますとともに、仙台市小学校長会のますますの御発展と会員の皆様の御健勝と御活躍をお祈りいたします。

小さな積み重ねで

千葉 博久（前 中田小学校）

「地域とともに歩む学校」と言われますが、元来「おらほの学校」というようにその町の一部でした。昔の地方では町に着任した先生はその日のうちに町中に知れ渡る存在でしたが、今の仙台市は大きな都市ですので数年で異動することが当たり前の存在になりました。教師も保護者・地域の方も適度の距離を取るようになりましたが、大切なことは残したいと思ってきました。

「子供が交通事故に遭った」「子供が迷惑を掛けた」という場合に、すぐに先生は駆けつけたものですが、近頃は「それって、どこですか?」「私も行った方が良いでしょうか?」という担任が多くなってしまいました。現場で子供を安心させ、関係の方に感謝や謝罪をしながら一緒に解決に当たることが大切です。そのような小さな積み重ねの中で、誠意を示し信頼を得てきました。

教育文化の継承が危ういと言われるようになって久しいですが、私は自分なりに取り組んできたつもりでした。しかし、世代交代のスピードに追いつくことができなかったという心残りが残ります。

仙台市の連合町内会が基本的に小学校区ごとに設置されていることを鑑みても、小学校の役割の重要性を感じます。後を託すようで申し訳ありませんが、教師だけは、校舎に通う公務員ではなく「おらほの先生」であってほしいと思います。

安きに流れず

佐藤 信哉（前 岩切小学校）

千人を超える子供たちの命を守り切ることは、容易なことではないことを、その任を終えた今、改めて感じています。なんとか使命を全うすることができたのは、諸先輩方をはじめ同僚からの貴重な導きや心強いサポートと、少しの「運」のよさがあったからこそと感謝の思いでいっぱいです。

かつてある職場で、新規事業の計画を提案した時のことです。ふだんは温和な上司に、「安きに流れるな」の言葉をもらいました。労苦を回避した計画で、安易に事業を進めようとしたことを見事に見抜かれ、喝破されたのです。私たち校長の仕事は、本気になって全力で取り組んでも、手を抜いても、他から見えにくいものです。まして、職場の長ですから、自身をたしなめてくれる人はいません。事案対応が続き疲れたとき、反対に何も起こらず平穏なとき、未熟な私は、つい楽をしたくなってしまうことが何度かありました。「安きに流れるな」は、そんなときの自身への戒めの一言でした。

東日本大震災以降、台風等、新型コロナウイルスと、安きに流れるいとまもなく、校長としての判断と対応が問われる時代がすでにやってきていることは間違いありません。このような時代を小学校長として生きる皆様に、声を限りに、心からのエールをお送りいたします。

これからの防災対応力のために

中辻 正樹（前 高砂小学校）

学校現場ではこれまで災害への備えとして、様々な防災の訓練や授業を積み重ねてきた。しかし東日本大震災から10年が過ぎようとしている今、当時の学校現場を経験していない教員が増えてきている事実がある。

そのような今、どのようにして子供たちの命を守る学習を進めていったらよいのだろうか。

一つは、学校全体としての取組である。教員が当時のことを語り部や施設の取材など、様々な場面を通して学び、副読本等も活用しながら防災の授業を各学年で積み重ねること。それを全ての教職員が支える、学校全体の取組とすることが大切である。

もう一つは、地域との連携である。近年、台風・大雨等の自然災害が頻発し、学校が避難所として活用される場面も多い。地域との連携の基に、実際の避難の場面や地域防災訓練を通して、学校の防災対応力を高めていくことが有効であると考え。地震・津波等の突然の被災とは違って、ある程度予測がつく自然災害からの避難やその訓練を通して、広く不測の災害への学びを深めていくこと。そのためには地域との更なる連携を深めることである。

校長としてのリーダーシップを発揮し、工夫を重ね、備える安心感と未来への夢や希望を持つことができる子供たちを、これからも育ててほしい。

先を読む

伊藤 雅亮（前 鹿野小学校）

私は、楽天イーグルスのファンであり、野村克也さんのファンでもあります。2月に急逝した野村さんですが、その言葉は示唆に富むものばかりで、私の学校経営の内なる指針でした。

例えば「好かれなくても良いから、信頼はされなければならない。嫌われることを恐れている人に、真のリーダーシップは取れない。」とか「命令するからには、全責任は監督にある。」「リーダーシップ

とは人を動かす、先を読むこと。」などは、常に意識していました。

これらの言葉を意識することで、教職員との距離感であったり、地域や保護者への情報発信のタイミングであったりを考えながら、様々な事柄を判断することができました。

中でも「先を読む」ことは、令和元年度の台風対応や新型コロナウイルス対応でも、うまくはできなくても慌てずに対応することができました。

先を読んで、備えがあれば憂いは減ることを実感した校長生活でした。

校長会の皆様、大変お世話になりました。ありがとうございました。

新入会員の皆様、「先を読む」と、試練を乗り越える腕試しの楽しみが生まれます。常に前向き、肯定的に進みましょう。

三つの校長会

明石 清二（前 上野山小学校）

震災発生後は、仙台市立荒浜小学校の復興に携わりました。防災無線で入る情報を整理し、教職員及び児童の安否確認や卒業証書、指導要録等の運び出し、卒業式の実施などを全力で行いました。

後ろ髪を引かれながら、4月には校長として川崎町立川崎第二小学校に着任しました。山間の学校であり、コップが壊れた程度と職員が話していたのが印象的です。所属した大河原教育事務所管内校長会では、「被災地の様子を知ること」を目的に沿岸部の被災地を訪問して交流を深めました。

ワルシャワ日本人学校では欧州北米校長会に所属し、年に一度、いずれかの学校に集まり校長会を開催しました。危機管理の面では、「テロから子供を守ること」が第一義であり、外部から校舎に通じる扉は全て^{ほうばく}防爆扉に変更し、2階までの窓は全てを防弾ガラスに変更するとともに、パニックルームも設置しました。外地においては、ロックダウンドリルの避難訓練が非常に大切であると痛感しました。

仙台市校長会では、「オール仙台」の合言葉の下、「各校長と協力し一致団結してことにあたる」とい

う最も根本的な危機管理の姿勢を学びました。

いずれの校長会でもいえること、それは、「校長は命を賭して子供を守ること。」これさえ肝に銘ずれば、校長として何もぶれることはありません。

子供たちの未来のために

南條 智重（前 大野田小学校）

学校には子供たちや保護者、同僚、地域の方々と多くの出会いがあります。子供たちの成長のために努力し、子供たちの姿を通して自分も成長できるのが教師という仕事の魅力でもあったと感じてきました。9年前、教頭1年目の時に東日本大震災を経験しました。教室の机やロッカーが倒れ、物が散乱し、子供たちが不安な表情で校庭に避難してきたときのことは、今でもはっきりと覚えています。その後は体育館で避難所を運営しながら、学校再開に向けて全職員が必死に頑張ってきました。そして、その後も、多くの方々の支援を受けながら、皆が復興に向けてできることを重ねてきました。その時から、東北の子供たちは誰よりも強く、誰よりも優しく育てほしいという願いを持ち続け、学校経営を進めてきました。この願いは自分の立場が変わっても持ち続けていきたいと思っています。私たちは、震災によって尊い命や多くの大切なものを失いましたが、子供たちの未来が消えることはありません。教育は子供たちの未来を創る仕事でもあります。子供たちが将来、自分の夢を持ち、幸せに生きていく力を育てることが、復興に向けた教育の使命であると考えています。

結びになりますが、これまで御指導くださいました校長先生方に心より感謝申し上げます。ありがとうございました。

命・心・恩送り

阿部 みゆき（前 古城小学校）

20代の後半、不意に「先生は、何でいつもそんなに、にこにこしているの？」と教え子に聞かれ、「そ

う？きっと、みんなというのが楽しいからです。」と答えた場面を、一人だけの校長室で思い出したことがあります。様々な瞬間の幸福な感覚がよみがえると同時に、浅学非才なまま今日を迎えてしまった自分への戒めとして、永く肝に銘じておかねばならぬ言葉の数々も思い出されました。教員生活を振り返る節目を迎え、そうした折々の言葉が今の自分を形成していることを実感し、導きと励ましをくださった多くの方々との邂逅に改めて思いを馳せております。

「恩送り」と言う言葉も、東日本大震災直後から「復興は教育の力で」を合言葉に無我夢中で学校運営を進めてきた色褪せぬ記憶とともに心を占めています。命の重さを、当たり前の日常の有り難さを、人のつながりの大切さを、校長として語り続け、未来を生き抜くことが恩送りになると伝えてきました。決断の指標は、常に、子供たちの命を守り、心の安定を図ることができるか否かであり、その達成が、己の恩送りともなる究極の使命だと考えてきました。

現在、新型コロナウイルス感染症が全世界を襲い、子供たちの命と心を預かる教育現場の危機的状況は極めて深刻です。次代を担う校長先生方の増大する負荷に対峙する姿に衷心よりエールを送る次第です。

支え合う笑顔

大森 喜美子（前 川前小学校）

地域の方々と話をする度に、決まって「子供たちから元気をもらっていますよ」とか「子供たちに負けないように頑張らなくては」と、皆さん笑顔で語ってくれます。私たち教職員も、同じような気持ちを持って、日々子供と接しているのではないのでしょうか。多忙な毎日が続いて、子供たちの元気な声、笑顔に接するといつの間にか疲れも忘れ、気持ちもリセットされ自然と力が湧いてきます。

退職の年に新型コロナウイルス感染症対応に見舞われ、学校運営に変更を余儀なくされたことや2011年の東日本大震災で学校が避難所となり対応に鼓舞激励した経験は、忘れることのできない出来事とな

りました。震災の年の卒業式は学校に避難されていた方々も参加してのふだん着での式でしたし、令和元年度は、卒業生と教職員だけでの心温まる式となりました。奇しくも小学校課程修了の卒業式がこのような形で行われたことは、子供たちにとっても生涯忘れ得ぬ思い出として残ることと思います。

私たち職員はどんな時でも力を合わせ、子供たちのために全力で職務にあたります。誇りに感じます。子供たちの笑顔に支えられ、教職員の笑顔にも支えられた教員生活でした。これからも笑顔で支え合える職場であり、子供たちに笑顔を届けていってほしいと切に願っております。

まあいいか。大丈夫！何とかなる！

相澤 経利（前 七北田小学校）

「まあいいか。大丈夫！何とかなる！」

故 佐々木浩二校長先生の言葉です。

発災後、蒲町小学校の校舎は、南側に傾き、東西校舎のジョイント部に15センチほど段差ができました。その校舎の中に荒浜で家族や家を流された方など、約1700人の方が避難していましたが、3日目には、町内会主体の避難所運営委員会が立ち上がりしました。4月からは、蒲町中学校体育館等での授業再開となりました。

そんな前例のない大ピンチのなか、佐々木校長先生の口癖は、「まあいいか。大丈夫！何とかなる！」でした。校長先生の言葉に根拠があったかどうかは分かりません。でも、我々職員は、どんなに心強かったことか。どんなに勇気をもらったことか。

校長の仕事は、多岐にわたります。課題も山積です。まさに校長の力量が問われる時代です。今後、たくさんのピンチの波に襲われることでしょう。そんなときの魔法の言葉が、「まあいいか。大丈夫！何とかなる！」です。

校長が職員の心を壊してはいけません。ましてや、自らの心を壊してはいけません。校長の笑顔が職員の笑顔に。職員の笑顔が子供の笑顔に。子供の笑顔が地域の笑顔に。そんな学校づくりができるといいですね。

非常事態に備えて

加茂 伸一（前 実沢小学校）

令和元年度も間もなく終了。自分は退職という時期に新型コロナウイルスの脅威が世界中を襲い、学校も臨時休業という非常事態。明日何が起こるか、本当に分からないものだ改めて思いました。

9年前となった東日本大震災は、当時の勤務校の下校間際を突然襲いました。後に、その被害の大きさに愕然としました。

非常事態は突然やってきます。地震はその最たるものです。どう対応するのか、悠長に考えている時間などありません。昔先輩に教わりました。常に頭の中を整理しておくことが大切。避難訓練の折、防災の日、その他折に触れて、もし今緊急事態が起きたらどうするかをシミュレーションしておく習慣を付けておくことが大切だと思います。これまでの計画がはたして機能するのか。私はその一環として、それまでの計画や決まり事を常に見直してみるということを実行してきました。

新任として当時の泉市に赴任し34年。本当に短かったように思います。これまでを振り返ると、悔いの残ることばかりですが、最後に校長として任を全うできたのは、未熟な私を支えていただいた校長会の皆様のお陰と心から感謝いたしております。皆様の御健康とますますの御活躍を陰ながら応援させていただきます。

校長先生の一言

櫻場 直志（前 黒松小学校）

私の教員人生は、養護学校から始まりました。教員になる夢を叶え、意気揚々と着任したものの、重度重複学級での生活は想像外のことばかりでした。散歩にお昼寝、おむつ替えの日々に、「子供の教育は、どうあればいいのですか……」と、当時の主任先生を何度も困らせてしまいました。そんなある日、校長先生は若手教員を集めて言いました。「私たちは養

護学校の先生です！」と。その強烈な一言は、私の教員人生を貫く言葉となりました。養護学校に4年間、その後小学校に勤務し、35年が経ちました。子供に誠実に向き合うことを教えていただいた一言でした。

先輩校長先生方を何度も見送りながら、「自分の退職はどのように迎えるのだろう……」と想像したことがあります。しかし、新型コロナウイルスにより、このような騒動の中で迎えるとは夢にも思いませんでした。2月28日、放送で「来週から学校はお休みになります……」と切り出したとき、「これで教員人生も終わりか……」と思ったら、不覚にも言葉が詰まってしまいました。

校長になり6年間、校長にしか分からない辛さを何度も味わいました。そんな時いつも心強かったのは、校長同士のネットワークでした。心から、ありがとうございました。

自分を信じて

佐藤 澄江（前 将監中央小学校）

今年度は新型コロナウイルス対策で、学校で決断しなければならないことがたくさんあったのではないかと思います。校長の一番の仕事は、「決断」だと思います。教育委員会から指示が来ることもありますが、その指示を現場でどのように行うか、指示がないときにどう判断してどのような対応をするか等、私たち校長は、たくさんの決断を強いられます。そのためにも、ふだんの経験から第六感を鍛え、決断するための情報をどこから集めるか考えておく、それが大事だと思います。そして、自分がその時にできる最善の判断をしたのですから、たとえ結果に不具合があったとしても、動じることなく、それを次に生かしてほしいと思います。

また、「守りに入らないで、迅速に動く」こと。守りに入ると、見えることも見えなくなってしまう、大きな決断ができなくなってしまう。初動が遅いと問題が大きくなることも多いです。

校長の仕事は精神的に大変な仕事ですが、学校が組織として動き始めたとき、学校が活性化して子供

たちが生き生きと活動しているとき、大きな達成感が得られます。水に何か落ちると波紋が起こり、それが周りに広がります。皆さんが起こした波紋が、周りに波及し、御自身が目指すよりよい学校の創造へとつながることを切に願っております。

地域・保護者との 備えあれば憂いなし

板橋 高広（前 長命ヶ丘小学校）

通常の学校生活を送ることができずに、年度末を迎えてしまうとは、全くの想定外のことが起きてしまいました。9年前の東日本大震災の時は、発災の3.11から少しずつではありますが、日々前進することができました。しかし、先の見通しが立たない今は、無力感でいっぱいです。

さて、「備えあれば憂いなし」という故事があります。ご存じの通り、常日頃から準備を万全にしておけば何事も心配することはない、という意味ですが、東日本大震災やコロナウイルスにいたっては全くといって当てはまりませんでした。

それでは、一大事でも前向きに学校運営を進めるには何が大事なのでしょうか。七北田小教頭時代の避難所運営と今回のコロナウイルス対応で、共通した備えの存在を見付けました。それは、地域・保護者の皆様との常日頃からの良好な関係です。避難所運営では、共に苦難を乗り越えていこうとする思いの共有がありました。コロナ対応では、学校への要望質問等がなく、学校の決断に理解を示していただきました。学校が困ったときは、地域や保護者の皆様から救いの手が差し伸べられました。

ふだんから全教職員とともに、地域・保護者の皆様と良好な関係づくりを心掛け実践することが、学校運営の肝です。

いざと言うときのために……

熊谷 敏（前 八乙女小学校）

3月中旬、校長室に来た新聞社の方が、「学校の子供たちの声っていいですね。」と、感想をもら

していました。“子供たちの声？”それは、1年生から3年生までの子供たちで、3月2日に臨時休業日になってから学校で過ごしている子供たちの声でした。ちょうど、休憩時間になった時間帯で、校庭に出る子供たちの元気な声でした。（感染予防のため、毎日10数人ずつの集団に分け、3～4クラス程度各教室で、マスクを使用し、一人一人の座席も間隔を空けながら、自主学習やその他の活動をしていました。毎日50～60人ほどの登校人数です。）今年の3月は、今まであたりまえだった毎日が、あたりまえでない毎日の連続になりました。先行きの見えない毎日が続き、“本当に正しいのか、そうでないのか”ただ、常に子供たちの健康面や安全面を考え、一つ一つの行事や、様々な出来事に対して、教職員が丸となって取り組んできました。幸いなことに、教職員が一枚岩となり、対応することができたことは、校長としても感謝の念で一杯です。“いざと言うときに、教職員一人一人が自分の力を発揮できる。”そのような職場であれば、これほど心強いものはありません。

何度も、いざと言うときがこないことを、陰ながら御祈念いたしております。

～集団としての、基本のき～

瀬戸 幸子（前 寺岡小学校）

同窓会入会式が間もなく終わりに差し掛かろうとしていた時に大地震発生。天井は全て落下。一体全体何が起こったのか、すさまじい光景が目の前に。

「〇〇先生。1年生に行って。〇〇先生は、特別支援学級。」6年主任ともう一人にとっさに声を掛けた。（6年生は何とかなる。）「大丈夫だから、落ち着いて。」子供たちに呼び掛けた言葉は、自分自身への呼び掛けでもあった。拡声器を片手に校庭から体育館に。子供たちを励まし、先生たちに指示を出した。到底、私だけでは的確な判断や指示はできなかった。それぞれの先生方が、学年の子供たちの状況を見て迅速に報告してくれたからできたことだった。全ての情報を私に。

子供たちの無事が確認できたと同時に沢山の方々

が体育館に避難してこられた。ここからがまたまたすごかった。集団への指示。慌てないで。みんなのことを考えて。話は静かに、よく聞いて。時間を守って。自分勝手はだめ。リーダーに報告して。いいですか。気付くと、常に子供たちへ言ってる言葉ばかり。小学校生活の基本, 集団行動の基本を徹底した。

鶴谷小学校での避難所が、整然と運営できたのも、振り返ってみればこうした基本の声掛けと行動を私も先生方も同じようにしてきたことによるものだった。

もちろん、集団としての先生方の働きぶりも実に見事だった。

ピンチはチャンス！

船山 雅和（前 高森東小学校）

学校の力は、ピンチを迎えるとよく分かると思います。生徒指導の問題や自然災害の対応、職員の事故、保護者のクレーム、そして職員の不祥事などたくさんのピンチがありました。毎日が予想もつかない不安、そして慌ただしさのなかで頭の中はいっぱいになることも度々ありました。

こんな時が続くはずがない、必ず希望のゴールがあるはずだといつも自分に言い聞かせて、基本に戻って教頭と相談しました。

周囲の校長先生たちはいつも温かく相談に乗ってくれたし「頑張ってください。」と励ましてくれたことは忘れないと思います。おかげで、子供たちを大切にする気持ちと職員を信じて、決断と実行を繰り返してきました。疲れて悩んでも、前に向かって職員と思いを共有して話し合えば、必ず同じ達成感を求める職員が現れます。乗り切れると思います。私は、身近にたくさんのチャンスにつながるがあり、学校力が増すことがあると思います。

孤独を感じたり、力の無さを思ったりすることは誰も同じです。情報を得る努力、謙虚に地域の方の力を借りることもありました。学校はすばらしい社会です。これからの時代は、更に変化することが考えられます。どうぞ先頭に立って肅々と動いていけば大丈夫です。自信を持って学校経営に取り組んでほしいと思います。

「反実仮想」で

富山 英明（前 愛子小学校）

たくさんの方々に支えられて歩んできた教員生活もあとわずかとなった令和2年3月。新型コロナウイルス感染防止のための突然の臨時休校。なかなか平穏無事に退職のときを迎えることはできないと改めて思い知らされた出来事でした。

すでに退職された先輩に「最後まで気を抜かず全力で。」と御助言をいただいていたのですが、やはりそのお言葉どおりに。何事も思いどおりとはいかないものです。

臨時休校となって、真っ先に思い出したのは、9年前の3月11日、年度末直前の震災のことでした。当時に比べればまだライフラインは確保されている。今のところ、子供たちや職員の命に心配は少ない。こうした現状を踏まえて、校長としてどう判断し、何をすべきか思案を巡らせました。

「反実仮想」という古語があるそうです。「もし～ならば」と仮定して考えることのように。今回の新型コロナウイルス、そして9年前の東日本大震災。常日頃から様々な事案を想定して「もしこうなったら、こうしよう」と考え、適切に対応する力を鍛えておくのも校長として必要なことかも知れません。

校長先生方のお手元に、この『廣瀬川』が届くころには、各学校において例年と変わらぬ教育活動が行われていることを心より願っています。



新任校長所感

学校経営に寄せる思い



明日も会える まぶしい笑顔

石垣 恵（生出小学校）

着任して2か月、子供がいない学校で、昨年末に撮影したという学級ごとの写真を見ながら過ごし、毎日同じ表情を眺めて名前を覚えようとしていた。いよいよその子供たちが笑顔で目の前に現れ、「また明日!」と帰って行く姿が本当にまぶしい。

新型コロナウイルス禍による影響は各業界に及んだ。休業を余儀なくされている企業も多い中、地域にも様々な工夫をして苦境に立ち向かっている商店がある。学校では子供たちの安全と心のケアと学習内容の補償のための工夫を求められ、日々試行錯誤が続く。大人が協力して必死に災害や苦難を乗り越えていく姿を見せ、困難に立ち向かい、未来を切り拓くたくましい子供たちを育てていかなくはという思いを持つ。

6月に入り、これまでゆっくり話をすることができなかった地域・保護者の方々とも思いを共有する場が少しずつ生まれている。職員と共にアイデアを出し、先輩の校長先生方に支えていただきながら新しい時代へ向けての学校づくりに力を注ぎたい。

子供たちの笑顔あふれる学校に

高橋 昌子（八木山南小学校）

これまでに経験のない3か月に及ぶ臨時休業を経て学校が再開し、ようやく学校に子供たちの元気な声が戻ってきました。感染予防策としての登校時の検温確認のため、昇降口で児童を迎え入れる日々の中で、日に日にたくましくなっていく1年生の姿に、児童の成長に接することができる幸せを改めて感じています。それと同時に、重いランドセルを背に大粒の汗を流しながら登校し、「頑張って学校に来たよ」と話す子供たちを目の前にして、校長としての

責任の重さを痛感しているところです。

先日「このようなときだからこそ、子供たちの笑顔があふれる学校にしたい」と職員に伝えました。安心できる居場所があり、助け合う仲間がいて、「分かった」「できた」の喜びがある、そして、達成感や学びの楽しさを感じて笑顔になれるように支援する、これが今学校の担うべき役割の一つと考えます。

保護者、地域の皆様のお力添えをいただきながら、子供たちの笑顔のために教職員がワンチームとなって協働できるよう、全力で取り組んでまいります。

笑顔かがやく楽しい学校に

湊村 祐司（太白小学校）

太白小学校に着任してから2か月ほどが過ぎ、校舎3階から望む太白山の深緑が、美しい季節を迎えています。4月・5月は、主役の子供たちがいない静かだった校舎も、6月に学校が再開し、子供たちの元気な声が響くようになりました。また、毎朝の街頭指導で交わす、子供たちの元気な挨拶や笑顔を見ると（やっと、少しずつ、学校らしさが戻ってきたな）という思いを、日々、強く感じています。

学校は、これからも、当面の間、「新しい生活様式」を踏まえた教育活動が続く、先を見通すことが難しい状況に置かれることがあると思います。しかし、このような時だからこそ、子供たちの健やかな成長のために、教職員が一丸となって知恵を出し合い、保護者の方々の温かい応援や地域の皆様の力強い支援をいただきながら協働の体制を築き、本校のスローガンである「笑顔かがやく楽しい学校」を目指して、学校経営を進めていけるよう、校長として、人と人との和を大切に、視野を広げ、自己の研さんに努めていきたいと思っています。

子供とともに

熊谷 英之（芦口小学校）

子供がいない教室、靴箱が空っぽの昇降口、誰も触れない鉄棒……。子供が通ってこない学校って何なのだろう。オンライン授業を推進？3密回避？子供たちが通う学校の意義と役割を考えざるを得ない3か月でした。これまで是と信じて疑わなかったことが非とされる今、先生方にどんな価値を示しながら教職員を引っ張っていくのか、全く自信がありませんでした。そんな中、諸先輩方から励まされ、近隣の校長先生方から情報や助言をいただき、なんとか船出することができました。「地域と保護者は温かいですよ」と石川校長から引き継ぎましたが、温かな地域と保護者になるために、絶え間ない努力があったことと思います。そこにあぐらをかくことなく、地域と保護者からより一層力をもらえるよう、自分なりに精一杯励んでいこうと思います。「校長先生、おはようございます！」校門でマスク越しの挨拶を子供たちから受けるたびに、責任を痛感しています。子供あつての学校。日々、精進していく所存です。

語り継ぐもの

高橋 美奈子（折立小学校）

臨時休業で始まった今年度ですが、保護者も地域の方も学校の考えや対応に理解を示し協力してくださっています。非常時は、学校と家庭と地域とが連携協力して子供を育てていくという震災復興時の精神が今も引き継がれていることを実感するとともに、これまで築いてこられた方々に感謝する毎日です。

本校は青葉区唯一の被災校で、平成25年度末まで折立中学校内のプレハブ校舎で生活していました。その時に始まった中学校との交流活動や折小ソーランなどは今も続いており、特色ある教育活動として根付いています。一方、成り立ちとそこに込められた思いなど当時を知る職員は年々少なくなっています。行事や学校生活の在り方を大きく見直しているこの機会に「本校が語り継ぐもの」の視点も加えて整理し、当時の思いも含めて震災から10年目の学びにつなげていかなければと考えているところです。

子供たちが自分の地域を自分の言葉で語れる人に育っていけるよう、家庭や地域と連携して学校経営に取り組んでまいりたいと思います。

未来のつばさすこやかに

石川 隆夫（川平小学校）

「見守り隊」「にこにこ先生」「くさとりたい」などなど、校長室前廊下にはこれまで見たことのないほどのお世話になっている多くの地域の方々の写真があります。開校以来、地域の方々が児童を守り育ててくださった学校であることが分かります。「学校から子供たちの声が聞こえるようになって本当によかった。私たちも元気になります。」と、見守りをしていただいている方から声を掛けられました。

「ひろがる歌に胸はずむ 知恵をあわせて学ぶとき 未来のつばさすこやかに」

これは、川平小学校校歌の2番の歌詞です。現在の困難な状況において歌さえも制限され、いまだ児童の歌った校歌を聞けない状況にあります。しかし、それに続く歌詞にあるように、このような時だからこそ活動を工夫し、子供たちの学習、健やかな成長を保障し、未来へと翼を広げて羽ばたかせねばならないのだと思います。地域の方々への恩返しを、どんな状況でも力強く成長する子供たちの姿で示すことができるよう日々取り組んでいきたいと思っています。

地域とともに

鈴木 淳（長命ヶ丘小学校）

「本校は地域とのつながりが深いから、様々な場面に顔を出すことになりますよ。」と、引継ぎで前校長から話をいただきました。地域とのつながりを大切に生かした学校経営を行いたいと思う自分にとって、うれしい一言でした。「チーム長命ヶ丘小」として、組織力を生かし、その中で教員一人一人を高める学校経営を考える一方で、「チーム長命ヶ丘」とも考えました。地域の方々が各々の立場で教育に携わり、子供たちを育てていくチームの取組は、仙台市が目指すコミュニティスクールへの素地形成に向けたものとなります。この素地は全てこれまでの歴代校長をはじめとした教職員、地域の皆様の御尽力によることは言うまでもありません。その中で、バトンを受け継いだ自分は何ができるのかと、まだまだ明確なビジョンが描けず、今般の新型コロナウイルスの対応と併せて、悩む日が続いているのが現状です。今後、早くビジョンを示しつつ、子供たちの笑顔と地域の方々と触れ合い、本校が「地域の学校」としてあるために、日々まい進していく所存です。

あの3か月がもたらしたもの

鈴木 一生（北中山小学校）

「子供が学校に戻ったら、まるで元のとおりだと錯覚してしまうことを危惧している。コロナの前と後では、世界が全く違ってしまった。もしコロナ以前の世界に我々が逆戻りしてしまったら、学校から子供がいなくなった3か月が無駄になるのではないだろうか……」5月29日、そのようなことをうつうつと考えながら、始業式の話や入学式の式辞を何度も推敲しておりました。

そして、6月1日、無事に始業式と入学式を行うことができました。欠席は全児童657名中1名でした。新入学児童も時間どおりに全員登校しました。

それ以来、子供たちの存在感と職員の活気が学校中に満ちあふれています。それだけで、圧倒的に幸せな気持ちが湧き上がってきます。子供の椅子の雑音すら心地良い。そうだ。そうだったと自分がこの仕事を続けてきた理由を改めて思いました。

このコロナ禍を乗り越えるのか、課題は山積です。しかし、あの3か月を経たことで、前よりポジティブに立ち向かえる気概を持てたと感じます。

学校経営に寄せる思い

鶴田 忠幸（根白石小学校）

本校のホームページのトップに、「仙台市唯一の木造校舎」とあります。現在の校舎になってから、約90年になると聞いています。保護者や地域の方から、親子三代でこの木造校舎で勉学したという話を多く聞きます。地域が大事にし愛着を持っていること、この校舎で学ばせたいという思いを強く感じました。

地域の行事もあります。本校では、伝承活動を大切にしています。地域の方々から子供たちへ、上級生から下級生へつないでいます。

今年度は新型コロナウイルス感染防止のため、様々な行事や活動が中止となっています。どの行事や活動を行っていくか、それらの意義を教職員と確認する機会となりました。子供たちの成長にとって大切なものであることを再確認しながら、地域とともに歩む学校を続けていきたいと思っています。子供たちには、学校を、そして地域を愛し大事にする心を更に強く持ってほしいと願います。

後10年で、100周年です。校舎と共に、地域の思い

を大切にしていきたいと思っています。

交流学習2年目 日々感謝を忘れずに

阿部 英徳（実沢小学校）

明けない夜はないと信じ、着任早々から新型コロナウイルス感染症に伴う様々な対応に追われたこの2か月間。

6月1日、職員玄関前での始業式。3名の新入生を迎え、実沢小で入学式を無事行うことができ、地域、保護者、教職員と共に喜び合いました。子供たちあつての学校であると、強く感じました。

朝8時、3台のタクシーに乗車した7人の子供たちを「いってらっしゃい。」と、根白石小での交流学習に送り出す毎日が始まりました。根白石小の皆さんには、実沢小の子供たち・先生方を温かく迎え入れてもらいながら交流学習が進んでおり、感謝の気持ちで一杯です。交流学習を通して、子供たちは新しい友達を作り、より多くの関わり合いの中で、自分とは異なった思考や価値観に触れ、学びを深め、コミュニケーション能力を育んでいます。

私は校長として、「一人一人が夢と希望を持ち、心身ともにたくましく生きる児童の育成」のため、保護者や地域の思いを大切に、職員と共に何ができるかを考えながら、学校経営に当たってまいります。

頼もしい教職員とともに

高橋 正行（加茂小学校）

加茂小学校に着任してから3か月が経とうとしています。かつて水泳記録会が開催された頃は、毎年訪れていた学校であり、大変懐かしく思います。

着任して印象に残った一つ目は、先生方の明るさです。再開の見通しが立たない中でも職員室からは笑い声が絶えず聞こえていました。頼もしく感じましたし、子供たちへも必ず良い影響をもたらすだろうと思います。

二つ目は、先生方のフットワークの軽さです。休業中、連絡の行き違いで登校してきた児童の帰宅が確認できない事案が起こった時のことです。管理職が指示を出す前に、「自宅周辺を確認してきます。」と先生方が手分けして自主的に搜索に出かけていきました。自分事として行動できる先生方の意識の高さに感心した次第です。

加茂小の先生方の姿は、前任の校長や現教頭が築

き上げてこられた“財産”ですので、しっかりと引き継いでいきたいと思います。

ようやく教育活動が再開しました。頼もしい教職員とともに、家庭、地域としっかり連携して学校経営に取り組んでまいります。

校長としての使命感

柳生 博之（高森東小学校）

着任早々、待っていたのは新型コロナウイルス感染防止への対応でした。また、心待ちにしていた教育センターでの「新任校長研修」は第1回目から中止…。新米校長である私の不安は、日に日に増していきました。

幸いなことに、先輩の校長先生方から励ましの電話をいただいたり、勤務校の教頭や教務主任、事務員をはじめ教職員に支えてもらったりする中で、校長の職責の重さや、学校という組織のすばらしさについて再認識し、校長としての使命感が少しずつ湧いてきました。

6月1日、待ちに待った令和2年度の授業がスタートしました。また、出番を待っていたモーニングコートに袖を通し、やっと入学式に臨むことができました。

まだまだ新型コロナウイルス感染防止のための取組が続きます。近隣校や地区会の校長先生方と連絡を取り合いながら、この状況下での学校経営に取り組んでいきたいと思います。

何物にも代えがたい学びの場

松田 修一（旭丘小学校）

4月半ば、図書室前の廊下の壁に「初春の令月にしてきよ かげやわ うめ きょうぜん こ ひら らん はい気淑く風和らぎ梅は鏡前の粉を披き蘭はか かお珮後の香を薫らす」と書かれた句を目にしました。御承知の通り「令和」の語源となった万葉集の歌です。

一年後、始業式も入学式もできず、例年どおりに桜の花が咲き誇る風景が、かえって寂しさを助長させるような事態が訪れることを誰が予想したでしょう。家から出ることも友達と会うことも制限された子供たちが経験した不安、ストレスは計り知れません。

しかし、子供たちのすごさに驚かされます。ようやく学校が再開したにもかかわらず、感染防止のため窮屈な日常を強いられている中、学校で過ごせる

喜び、皆と学べる幸せを全身で味わっています。さらに、その子供たちと本当にうれしそうに笑顔で向き合っている教職員の姿。物理的距離を保ちつつも、そこには心と心を通わせた温かな学び合いがあります。この何物にも代えがたい学びの場を、再び失うことがないように、できる限りの予防策を講じ、子供たちへ確かな学びを、しっかりと育んでいきたいと思います。

地域のすばらしさと 伝統を感じながら

及川 隆行（燕沢小学校）

6月から毎日登校する子供たちと挨拶を交わしながら、とても大きな喜びを感じております。

本校の校章には、「三羽の燕」が描かれていて、それぞれの進路に、未来に向かってたくましく羽ばたいていく姿を表しています。「小」は子供たちが中心となる学校、その中には温かくしかも厳しく見守る教師の姿を宿しています。「輪」は心をつなげて、常に「和（輪）」をもって協力し合う姿を表しています。その校章が表す意味に触れた時、とてもすばらしいと感じ気持ちが引き締められました。

今年度は、新型コロナウイルス感染症拡大防止のための臨時休業が続き、限られた中ではありましたが地域の方々と話し合い、多くの協力をいただきました。校長室には、歴代の校長、父母教師会長の方々の写真が飾られています。いつも見守られながら仕事をさせていただいておりますが、歴代会長の方々には現在も学校に関わっていただいている方がたくさんおられます。地域とともに歩む学校づくりに、日々努めていきたいと考えています。

顔の見える・声の届く関係づくりを みんなの笑顔のために

早坂 敦哉（高砂小学校）

本校は、七北田川を挟んで東西に広がる学区のほぼ中央に位置しています。七北田川の東側は津波に対する備えが、西側は大雨による浸水に対する備えが必要な地域です。例年11月に地域防災訓練を実施しており、防災意識が大変高い地域です。

地域の方々の学校に対する思いも強く、とても協力的です。今年度は新型コロナウイルス感染拡大防止のため、学区民運動会をはじめ様々な行事が中止となってしまいました。この状況で、いかに地域や保護者との連携を図っていくかが大きな課題です。

約2か月遅れでの新学期スタート。学校再開を待ちわびていた子供たちと教職員、みんなが楽しく笑顔になれる学校を目指します。そのために、地域や保護者と「顔の見える・声の届く関係づくり」を推進してまいります。学校と家庭、地域の3者が力を合わせ、未来を担う子供たちの育成に取り組めるよう学校経営に尽力する所存です。全ては、みんなの笑顔のために。

安心して学ぶことができる 学校づくり

星 恭典（福室小学校）

本校は、昨年度50周年を迎えました。その記念誌には、福室小学校が、これまで学校の教職員だけではなく、保護者、地域、そして子供たち自身が、それぞれに知恵を出し合い、互いに学び合いながら一緒につくりあげてきた学校であることが記されています。また、開校時につくられた校章には、放射状に広がる5本のペンが表現され、学ぶことを土台とする理念が示されています。私は着任して、校章や記念誌から、学校としての地域や家庭、そして学ぶことへの向き合い方に感動を覚えました。その校章の手書きの原画は、今も校長室に飾られ、私を見守ってくれています。

このように本校にこれまで関わってきた多くの方々の思いを感じながら、今改めて学校の存在意義を考えさせられています。現在、学校を取り巻く様々な課題はありますが、校章に恥じぬようあらゆる方

法を考え実行しながら、子供たちはもちろん、大人自身も安心して学ぶことができる学校づくりに取り組んでいきたいと考えています。

また明日ね！

中村 譲（袋原小学校）

着任してすぐ、地域の方々から聞いたのは「子供たちのために」という思い。聞けば、子供たちの安全や活動を支えてくださるサポーターが、地域にはたくさんいらっしゃるとのこと。本校の854名は、そうした温かい目に見守られています。

コロナ禍により、学校は未経験の対応を迫られています。校長として難しい判断を求められる状況下、背中を押してくれるのは教職員たちの心意気です。「とにかくまずやりましょう。」とすぐに動き出す機動力と柔軟性。ここにも「子供たちのために」という思いが根付いています。

6月に子供たちが学校に戻ってきました。1年生もようやく入学式を迎えました。その中に、「校長先生、お仕事ご苦労さまです。」と言って帰っていく子がいました。思わず吹き出してしまいましたが、この笑顔が明日も学校で見られるようにと、「また明日ね！」と返しました。

温かい地域の方々、頼もしい教職員と共に、子供たちの笑顔を全力で守ることが校長の使命と考えます。毎日笑顔で「また明日ね！」と言えるように。

編集後記

昨年度末から続く地球規模の大災害となったコロナウイルス感染症のため、あらゆる業種で新しい生活様式での生活を余儀なくされています。感染症が流行し、ワクチンや特効薬が開発されていない状況下、年度末の3月から3か月にわたって続いた臨時休校を終え、6月1日により学校を再開することができました。全国の学校関係者は、休校期間中も学校再開後も、いかに感染を予防するか、休校中の子供たちの学力、体力、心のケアにどう対応するべきかなど、新たな課題に直面しながら対応に当たってきました。これまで誰も経験をしたことがないこの目に見えないウイルスを相手に苦慮しながら、子供たちにとって学校を「安心な」「安全な」「居心地のよい楽しい」場所にしようと、日々困難な決断に迫られながら学校経営に努められている様子が、多くの先生の記事からも拝察することができました。まさに、今年度の編集テーマである「防災対応力を向上させるための取組をとって未来を切り拓く児童を育む学校経営」について、新たな課題に直面している最中での発行となります。このような状況の中だからこそ改めて考えられる教育の原点について、しっかりと見つめながら私たち教育者が果たすべき役割を果たしていかなければと考えます。お忙しい中原稿執筆に御協力いただきました退職校長先生方、校長先生方に心から感謝申し上げます。

（98号チーフ 古元 記）

編集担当者：古元 良和（上愛子小） 川合 輝文（川前小） 小池 正弘（四郎丸小）